

経験型精神看護実習教育ワークショップによる実習指導への効果と今後の課題 ～実習施設と大学協働の取り組み～

安永薫梨*, 松枝美智子*, 安田妙子*, 中津川順子**,
村島さい子***, 中野榮子*, 安酸史子*

Experience-Based Psychiatric Nursing Practicum: Cooperative Workshops had Effects on Teaching

Kaori YASUNAGA, Michiko MATSUEDA, Taeko YASUDA, Jyunko NAKATSUGAWA,
Saiko MURASHIMA, Eiko NAKANO and Fumiko YASUKATA

要 旨

A大学では、経験型実習教育を行っている。しかし、始めて日が浅いため経験型実習教育についての理解や技能が教員と看護師に不足している。そこで、チームティーチング体制を強化すると共に実習教育の均質化とレベルアップをはかるために、実習施設と大学が協働し、経験型精神看護実習教育ワークショップを行った。

本研究の目的は、実習施設の看護師と教員が共同で、ワークショップを企画・運営し、開催したことによりもたらされたワークショップ参加者の実習指導への効果を明らかにすることである。

研究の対象は、ワークショップ企画・運営委員会の議事録と構成的・半構成的質問紙調査とした。分析方法は、量的データはSPSS11.0J for Windows を用いて単純集計を実施した。質的データは、特定の理論に基づかない質的帰納的分析を行った。

その結果、ワークショップの参加者の90.5%が、ワークショップへの参加が実習への実り(学生の学び)につながったかという問いに対して、5段階評価のうち「全くそう思う」、「だいたいそう思う」と答えていた。また、71.4%がワークショップは実習指導に役立ったかという問いに対して、「全くそう思う」、「だいたいそう思う」と答えていた。

キーワード: 経験型実習教育, 精神看護, ワークショップ

緒 言

指定規則の留意点によると精神科病棟における臨地実習とは、「知識・技術を看護実践の場に適応し、看護理論と実践を結びつけて理解する能力を養う内容とする」とある。安酸(2003)は、将来にわたって看護の諸技能を看護技術にそしてアートにまで高めていくためには、経験という学力を学ぶ場として実習教育は非常に重要であると述べている。

A大学では、経験型実習を教育の根幹に据えてい

る。2年次の後期に、精神看護学の講義の途中で精神看護実習を行っており、学生が講義—演習—実習—講義の有機的連関の中で理論と実践をつないでいけるようにカリキュラムが組まれている。このような中、平成16年度は初めての経験型実習ということもあり、実習施設の看護師、教員を対象として経験型実習教育の理論と実際を学ぶこと、及び実習目標を共有することを目的にワークショップが行われた。実習後の反省会では、プロセスレコードに関する指

*福岡県立大学看護学部
Faculty of Nursing, Fukuoka Prefectural University

**東海大学健康科学部
Faculty of Nursing, Tokai University

***元福岡県立大学看護学部

連絡先: 〒825-8585 福岡県田川市伊田4395
福岡県立大学看護学部精神看護学講座 安永 薫梨
E-mail: yasunaga@fukuoka-pu.ac.jp

導の難しさ、臨床指導者と教員の連携の困難性、臨床指導者以外の看護師が経験型実習教育に協力することの困難性といった問題が浮かび上がった。錦織(2002)は実習環境改善のための取り組みとして実習施設・学校間の会議、臨床指導者会議、精神看護学実習担当者会議を実施したと報告している。加藤(2004)は臨床指導者と教員の連携を助けるために成人看護実習指導の手引きを用いたと報告している。作田(2004)は急性期・回復期看護実習において、臨床指導者と教員の役割と責任の明確化、連携の工夫として専門職としての対等性の確保に立つ相互理解、ミーティングにより指導チームという意識を育んだことを報告している。小林(2004)は臨床実習の教育効果を上げるためには、教育機関と臨床が実習の目的・目標を共有し、連携して教育に携わることが不可欠として、教員、学生、看護師長、看護師で行う臨床カンファレンスを行ったと報告している。田村(2004)は実習施設と学校が良い連携をはかるために、看護部長などと話し合いをしたり、県や看護協会の主催する研修会及び看護研究の指導に教員が関わったりしたと述べている。また、教員がそれぞれの担当の病棟に自由に出入りし、必要に応じて研修したと報告している。小川(2004)は、教員の実践能力の維持・向上、病院スタッフとの人間関係の形成、学生の受け入れ態勢の整備を目的に、実習病院での研修や勉強会に参加すると共に、連絡や報告以外に相互理解のための討議の場として実習指導者会議を活用していると述べている。さらに病院スタッフによる講義・演習を取り入れ、実践力の養成、学生とスタッフが実習前から互いを知る機会を持っていたと報告している。文部科学省は平成11年から看護系大学と実践の場の連携と協働を目的に「看護学教育ワークショップ」を千葉大学で開催しており、大学と実習施設の参加を求めている。このことについて中村(2003)は、大学における看護学基礎教育において、大学内の講義や演習・実習に代表される実践教育の重要性を示していると述べている。

以上より、精神看護学以外の分野では、教育機関が実習施設との連携を強化するため、実習指導の手引きの使用、実習に関する会議の開催、看護研究の指導、実習施設での研修や勉強会への参加が報告されている。また、実習施設と大学の連携と協働を目的にワークショップを開催したといった報告もされている。しかし、実習施設の看護師と大学の教員が

共同でワークショップの企画・運営をしているという研究や報告はみられなかった。

精神看護学の分野では、実習環境改善のための取り組みとして、精神看護学実習担当者会議を実施したという報告がされている。しかし、実習施設の看護師と大学の教員の連携を強化するために、両者が共同で、ワークショップを企画・運営したという報告はみられなかった。

そこで、本研究の目的は、実習施設の看護師と教員が共同で、ワークショップを企画・運営し、開催したことによりもたらされた実習指導への効果を明らかにすることとした。また、A大学では実習施設と大学が連携を強化し、4つの実習施設で実習を行うため、病院風土や看護実践レベルが異なることが予測された。そのため実習の指導体制や指導内容、ひいては学生の学びに差が出る可能性が考えられるので実習教育の均質化と一層のレベルアップを図るために、実習施設の協力を得て企画の段階から実習施設と大学が共同でワークショップを開催した。また、精神看護実習担当者会議や実習前の研修だけでなく、ワークショップも行う方がさらに実習施設と大学の連携を強化する上でよりよいと考えた。このようなワークショップが定例で行われるようになれば、大学と実習施設の連携が深まり、ひいては学生への教育の質と臨床における看護ケアの質を高めることができる考える。

用語の定義

1. 経験型実習教育

安酸(2006)は、経験型実習教育を「複雑な現象のなかで経験を学習者が自ら意味づけしていくという学習形態をとる実習」と定義している。本研究では、この定義を採用した。

2. ワークショップ企画・運営委員会

経験型精神看護実習教育ワークショップの企画、運営、開催を中心に行う委員会のこととする。

方法

1. 研究デザイン

実習施設の看護師(主に臨床指導者)と教員が協力して経験型精神看護実習教育における連携を強化するための効果的なワークショップを作り上げていくというプロセスに重きを置いたアクションリサー

チを実施した。その中で、実習後ワークショップ時に1回、構成的・半構成的質問紙調査を実施した。そして、質問紙の結果やワークショップの企画・運営委員会の議事録の内容より、実習指導に関する効果を評価した。

2. 研究の手順

- 1) A大学精神看護実習の実習施設4ヶ所の病院管理者と看護管理者に研究への協力を要請した。
- 2) コミュニケーション技術を習得するための学内演習に研究協力施設から看護師を派遣してもらった。
- 3) 研究協力施設からワークショップ企画・運営委員を選出してもらった。
- 4) ワークショップ企画・運営委員会を2005年5月24日、6月9日、8月8日、11月8日の計4回(実習前3回、実習後1回)開催し、ワークショップの内容、方法、運営担当者、ワークショップを実施しての成果と問題点等について検討した。
- 5) 2005年9月29-30日に経験型精神看護実習教育ワークショップⅠ(実習前2日間)、11月8日に経験型精神看護実習教育ワークショップⅡ(実習後1日)を実施した。なお、精神看護実習は10月を2週間ずつの2クールに分け、1グループ学生5名で構成された、合計8グループで実施した。
- 6) 経験型精神看護実習教育ワークショップⅡの参加者を対象に経験型精神看護実習教育ワークショップなどに関する構成的・半構成的質問紙調査を実施した。

3. 研究の対象

- 1) 経験型精神看護実習教育ワークショップ企画・運営委員会の議事録

議事録を研究の対象とした理由は、ワークショップを企画・運営していく上で、どのようなプロセスを経て取り組んだのかを明確にすると共に評価するためである。具体的な内容については、企画・運営委員会で議論された内容やその結果などに関することである。

- 2) 質問紙調査

経験型精神看護実習教育ワークショップⅡ(実習後1日)の後に実施した質問紙調査では、ワークショップ参加者27名に配布し、回収数は21部、回収率は77.8%であった。

4. データ収集期間

データ収集は2005年5月～2005年11月に行った。

5. データ収集と分析の方法

- 1) 経験型精神看護実習教育ワークショップ企画・運営委員会の議事録

- (1) データ収集

4回の企画・運営委員会で話し合われた内容を記録した。

- (2) 分析の方法

「ワークショップのスケジュールやプログラム内容、評価に関すること」、「企画・運営委員会に関すること」に注目し、第1回企画・運営委員会、第2回、第3回、第4回に分け、分析した。分析の妥当性を高めるために研究者間で分析したものを持ち寄り、意見が一致するまで検討した。

- 2) 質問紙調査

- (1) データ収集

①研究対象者の属性、経験型精神看護実習教育ワークショップの内容・方法などの評価や実習指導への効果について問う独自の構成的・半構成的質問紙を作成した。具体的には、「ワークショップは実習指導に役立ったか」、「実習教育の均質化とレベルアップにつながったか」などについて問い、「全くそう思う」、「だいたいそう思う」、「どちらでもない」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の5段階で回答してもらった。また、ワークショップに関する意見については自由記載とした。

②質問紙は無記名とした。

③質問紙は経験型精神看護実習教育ワークショップの会場で配布し、ワークショップ終了後にワークショップの会場外に置いた回収ボックスにて回収した。

- (2) 分析の方法

①量的データは、SPSS11.0J for Windowsを用いて単純集計を実施した。

②自由記載については、ワークショップによる参加者への効果に注目し、質的帰納的にその文章の意味の本質を取り出す方法を用いた。分析の信頼性・妥当性を高めるために1人の研究者が分析した結果を共同研究者が再度検討するという作業を意見が一致するまで行った。

6. 倫理的配慮

- 1) 研究対象者が教員の場合、教員が所属する教育機関の学部長に研究の主旨を説明し承諾を得た。研究対象者が臨床指導者もしくは実習施設の看

護師の場合、病院長及び看護部長に研究の主旨を説明し承諾を得た。

- 2) 研究対象候補者に研究の概要や方法、研究への参加の有無により何ら不利益を被らないこと、一旦協力を申し出た後でも中止する権利を有することを説明した上で、承諾書にサインをした人を対象者とした。
- 3) 研究対象者、研究対象者が語った患者や学生など、個人や施設が特定できるようなデータは匿名化して処理した。
- 4) データは鍵のかかる保管庫に収納し、研究終了後シュレッダーにかけて廃棄した。
- 5) 研究の公表に際しては、個人や施設が特定できないように固有名詞は匿名化した。
- 6) 本研究は福岡県立大学研究倫理委員会の承認を得た後に開始した。

結果

ここでは、経験型精神看護実習教育ワークショップ企画・運営委員会で議論された内容やその結果、経験型精神看護実習教育ワークショップによる参加者への効果に分けて結果を述べる。

1. 経験型精神看護実習教育ワークショップ企画・運営委員会で議論された内容やその結果

ワークショップの企画・運営委員会を実習施設と大学が協働して行う目的は、双方に所属する精神看

護実習指導に携わる教員や看護師のニーズ、レベルに沿ったワークショップを開催し、実習指導の成果をこれまで以上に上げることであった。委員会のメンバーはA大学の精神看護実習施設の看護師で、主に実習指導にあたる看護師11名と、精神看護実習を担当する教員7名で構成された。

精神看護実習の前に3回、実習後に1回の合計4回の経験型精神看護実習教育ワークショップ企画・運営委員会を開催した。1回目の実習前ワークショップ企画・運営委員会の参加人数は、看護師8名、教員5名、2回目は看護師7名、教員4名、3回目は看護師9名、教員5名であった。4回目の実習後のワークショップ企画・運営委員会の参加人数は、看護師9名、教員5名であった。勤務の都合等で実習施設から1人もワークショップ企画・運営委員会に参加できない場合は、FAXで意見を寄せてもらった。

第1回目の委員会では、表1に示す通りゆとりを持ったスケジュールや勤務時間内に準じたスケジュールといった〈スケジュールに関する要望〉、講演や事例検討会に関する要望、実習に関する打ち合わせの時間やアイス・ブレイキングの時間、各実習施設の継続教育の紹介を設けるといった〈プログラム内容への要望や提案〉、〈実習前ワークショップの評価方法〉が創出された。第2回目の委員会では、表2に示す通り講演内容、事例検討会に関する要望、実習施設紹介の場や実習施設と教員の連携に

表1 第1回企画・運営委員会で創出された内容

企画・運営委員会	創出された内容		議事録
第1回 2005.5.24	スケジュールに関する要望	ゆとりを持ったスケジュール	・スケジュールにゆとりを持たせてほしい。
		勤務時間に準じたスケジュール	・時間は中途半端な時間でなく、勤務時間に準じてほしい。
	プログラム内容への要望や提案	講演に関する要望	・教材化についてもっと知りたい。 ・指導者や病棟が変わるので昨年と同様の経験型実習教育についての概論的な講義も必要である。
		事例検討会に関する要望	・昨年の困難事例を検討する時間を設けてはどうか。
		実習に関する打ち合わせの時間を設ける	・教師との打ち合わせや話し合いの時間を増やしてはどうか。
		アイス・ブレイキングの時間を設ける	・アイス・ブレイキングの時間を設ける。
		各実習施設の継続教育の紹介を設ける	・院内研修や勉強会の紹介も良いのではないか。
実習前ワークショップの評価方法	実習前ワークショップの評価を行う時期	・実習後ワークショップ時に実習前ワークショップの評価を行う。	

関して話し合う場を設けるといった＜実習前ワークショップのプログラム内容への要望や提案＞、実習の問題点などについて意見交換をする、実習のまとめに関するグループの発表内容を検討するといった＜実習後ワークショップのプログラム内容への要望や提案＞が創出された。第3回目の委員会では、表3に示す通り事例の取り上げ方、事例検討会のグループの作り方といった＜実習前ワークショップに行く事例検討会の方法＞、ワークショップの運営は大学が中心に行くといった＜ワークショップ運営に関する要望＞が創出された。以上の3回の企画・運営委員会を経て、ワークショップのプログラム内容が決定した。具体的な内容については、「現代大学生気質と教育のコツ」、「経験型実習教育の基本的な考え方」、「経験型実習教育の実際」をテーマとした講演や事

例検討会、実習施設紹介であった。第4回目の委員会では、表4に示す通り講演の講師が適切といった＜ワークショップに関する肯定的な評価＞、現実と講演内容のギャップ、ワークショップの日程による実習への支障、ワークショップの日程による実習への支障、ワークショップの日程を減らす、ワークショップに関する看護師の理解不足といった＜ワークショップに関する否定的な評価＞、講演内容に関する提案、講演を臨床指導者だけでなく他の看護師にも聞く機会を設けてほしい、院内教育に盛り込む、大学から遠い場合、実習施設でワークショップをしてほしいといった＜ワークショップに関する提案と要望＞、ワークショップで得られたことを学生に還元しようという意識を持つといった＜企画・運営委員にもたらされた実習指導に関する効果＞、企画・

表2 第2回企画・運営委員会で創出された内容

企画・運営委員会	創出された内容		議事録
第2回 2005.6.9	実習前ワークショップのプログラム内容への要望や提案	講演内容に関する要望	<ul style="list-style-type: none"> ・現代学生理解が難しいので学生の傾向とそれに沿った教育の方法を講義してほしい。 ・指導者の育成につなげたいので基本編と応用編を入れた講義にしてほしい。 ・新しく参加するスタッフがいるので経験型実習教育についての講演を入れてほしい。 ・発問の仕方、教材化についてもっと学びたい。
		事例検討会に関する要望	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年の実習で困ったことを検討するワークをしてはどうか。
		実習施設紹介の場を設ける	<ul style="list-style-type: none"> ・病院紹介を入れてはどうか。
		実習施設と教員の連携に関して話し合う場を設ける	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と（看護師）の連携の仕方も含めて話ができるとう良い。
	実習後ワークショップのプログラム内容への要望や提案	実習の問題点などについて意見交換をする	<ul style="list-style-type: none"> ・実習後ワークショップでは、実習の問題点などについても意見交換したい。 ・実習後ワークショップでは施設間での振り返りをしてはどうか。
		実習のまとめに関するグループ発表の内容を検討する	<ul style="list-style-type: none"> ・実習後ワークショップでは学生のまとめ（実習に関するグループ発表の内容）の検討をしてはどうか。

表3 第3回企画・運営委員会で創出された内容

企画・運営委員会	創出された内容		議事録
第3回 2005.8.8	実習前ワークショップに行く事例検討会の方法	事例の取り上げ方	<ul style="list-style-type: none"> ・病院から1事例出す。
		事例検討会のグループの作り方	<ul style="list-style-type: none"> ・グループに分かれて検討する。 ・グループは同じ実習施設が固まらないように編成する。
	ワークショップ運営に関する要望	ワークショップの運営は大学が中心に行く	<ul style="list-style-type: none"> ・運営の中心は大学でやってほしい。

表4 第4回企画・運営委員会で創出された内容

企画・運営委員会	創出された内容	議事録	
第4回 2005.11.8	ワークショップに関する肯定的な評価	講演の講師が適切 ・講師が適切だった。	
	ワークショップに関する否定的な評価	現実と講演内容のギャップ	・経験型実習教育についての講演の中身は入門編だったが、現状の指導の方が上でレベルが合っていないのではないか。
		ワークショップの日程による実習への支障	・ワークショップが（実習の）直前だと患者選択に支障をきたす。
		ワークショップの日程を減らす	・ワークショップの日程を減らした方が良い。
		ワークショップに関する看護師の理解不足	・ワークショップの必要性が浸透しておらずスタッフの理解が得られていない。
	ワークショップに関する提案と要望	講演内容に関する提案	・経験型実習教育についての講演は入門編とアドバンス編に分けて実施できると良いのではないか。
		講演を臨床指導者だけでなく他の看護師にも聞く機会を設けてほしい	・経験型実習教育についての説明を臨床指導者に限らず一般のスタッフにもオープンで説明する機会があったほうが良い。
		院内教育に盛り込む	・院内教育の項目に入れてもらってはどうか。
		大学から遠い場合、実習施設でワークショップをしてほしい	・大学から遠い実習施設は（ワークショップ）への参加が困難なので、施設ごとに出張で説明してほしい。
	企画・運営委員にもたらされた実習指導に関する効果	ワークショップで得られたことを学生に還元しようという意識を持つ ・ワークショップに参加したことで学生にどれだけ還元できるかということに気をつけている。	
	企画・運営委員会に関する否定的な評価	企画・運営委員会の回数が多い	・企画・運営委員会の回数が多い。
		企画・運営委員会に対する他の看護師の理解不足	・スタッフの理解がないと参加しづらい。
		他の看護師に負担をかける	・（委員会の回数が多く）他のスタッフに負担をかける。
物理的に次年度は委員を出せない		・実習施設から大学が遠いので来年は委員を出せない。	

運営委員会の回数が多い、他の看護師の理解不足や負担をかけること、物理的に次年度は委員を出せないといった企画・運営委員会に関する否定的な評価が創出された。

2. 経験型精神看護実習教育ワークショップによる参加者への効果

1) 対象者の特性

対象者の特性は、臨床経験年数が10年以上の人が21名中16名と全体の76.2%を占め、5年以上10年未満が4名(19.0%)であった。精神科での臨床経験年数は、10年以上の人が10名(47.6%)、5年以上10年未満が8名(38.1%)、3年以上5年未満が2名

(9.5%)であった。教育経験は、なしが12名と全体の57.1%であった。臨床指導者経験は、3年未満が12名と全体の57.1%であった。

2) ワークショップによる参加者への効果

まず、「ワークショップは実習指導に役立ったか」という質問については、5段階評価のうち、「全くそう思う」、「だいたいそう思う」が21名中15名と全体の71.4%であった。「実習教育の均質化とレベルアップにつながったか」という質問については「全くそう思う」、「だいたいそう思う」が15名(71.4%)であった。「教員と臨床指導者の役割の明確化に役立ったか」という質問については、「全くそう思う」、「だいたいそう思う」が15名(71.4%)で

あった。「実習中、臨床指導者、看護師、教員が連携して指導にあたることができたと思うか」という質問については、「全くそう思う」、「だいたいそう思う」が17名(81.0%)であった。「実習環境の調整に役立ったか」という質問については、「全くそう思う」、「だいたいそう思う」が17名(81.0%)であった。「実習への実りにつながったか」という質問については、「全くそう思う」「だいたいそう思

う」が19名(90.5%)であった。「実習中、学生にロールモデルを示すことができたか」という質問については、「全くそう思う」、「だいたいそう思う」が10名(47.6%)であった。また、自由記載より、ワークショップによる参加者への効果として、＜実習内容の共有ができた＞、＜経験型実習教育への関心の増大＞、＜実習指導意欲への動機付け＞といったことが明らかになった(表5参照)。

表5 ワークショップの効果 (質問紙の自由記載より)

ワークショップの効果	記述内容
実習内容の共有ができた	・他施設の現状が把握でき参考になった。
経験型実習教育への関心の増大	・発問の極意を教えてほしい。 ・事例の教材化を通してさらにプログラムの改善をしてほしい。
実習指導意欲の動機付け	・担当教員と臨床指導者による(実習の)振り返りの時間を設けてほしい。

考 察

経験型精神看護実習教育ワークショップ企画・運営委員会で議論された内容やその結果、経験型精神看護実習教育ワークショップによる参加者への効果より、経験型精神看護実習教育ワークショップを実習施設と大学が共同で企画・運営したことによるワークショップ参加者にもたらされた実習指導に関する効果と今後の課題について考察する。

1. 経験型精神看護実習教育ワークショップを実習施設と大学が共同で企画・運営したことにより、ワークショップ参加者にもたらされた実習指導に関する効果

経験型精神看護実習教育ワークショップを実習施設と大学が共同で企画・運営したことにより、企画・運営委員にワークショップで得られたことを学生に還元しようという意識を持つといった実習指導に関する効果が明らかになった。また、ワークショップの参加者の90.5%が「(ワークショップへの参加が)実習への実り(学生の学び)につながった」、71.4%が「ワークショップは実習指導に役立った」とワークショップ参加による実習指導への高い効果を示していた。これは、企画・運営委員を含めたワークショップ参加者が、ワークショップで得られたことを学生に還元しようと意識したことが、実習指導へ

役立ち、実習への実りといった学生の学びにつながったと考える。また、実習施設と大学が共同で、ワークショップのプログラムやスケジュールなどを決めたことから、ワークショップ参加者のニーズにより合ったプログラム内容につながったと考える。ただし、中野(2006)が「(ワークショップでは)参加者からの提案や、そこで起こってきたプロセスを大切に、予定にこだわらずに流れに沿っていく方が、学びは深まる」と述べるように、ワークショップの中で起きている状況に合わせて、プログラムを臨機応変に進めていくことも、今後は必要だと考える。

ワークショップによる参加者への効果として、＜実習内容の共有ができた＞、＜経験型実習教育への関心の増大＞、＜実習指導意欲への動機付け＞といったことが明らかになった。＜実習内容の共有ができた＞ことについては、中野(2006)が「自分一人の体験からでなく、お互い感じたことを分かちあうことで、お互い学びあうのだ」と述べるように、自分自身が体験した実習をワークショップに参加したメンバーと共有することが、自分の実習指導を振り返り、これでよかったのだと安堵したり、こういう風な考え方、指導方法もあるなど、実習指導に関する視野を広げたり、技を磨く良い機会になったと考える。＜経験型実習教育への関心の増大＞について

は、そのように実習指導に関する視野が広くなり、技を磨こうとすると、このようなときにはどのように教材化したらよいのだろうかなどと疑問や関心が増し、意欲的に実習指導に取り組んだり、ワークショップに参加したりすることにつながると考える。中野(2006)が、「(ワークショップの)参加者が『別にやりたくもねえよ』と冷めていては、ワークショップは成り立たない」と述べるように、ワークショップは生身の人間のコミュニケーションの場なので、意欲的に意見を述べたりなどの姿勢が重要と考える。そのためには、アイス・ブレイキングの時間を持つなど、参加者がリラックスしてワークショップに参加できる雰囲気作りが必要になる。＜実習指導意欲への動機付け＞については、ワークショップに関する理解や必要性が臨床指導者以外の看護師に浸透していないなどの問題はあるが、実習指導意欲の動機付けが高まることで、自分自身から臨床指導者になりたいという意志が芽生えたり、学生に関わろうとする姿勢につながると考える。特に、経験型実習教育では学生が経験していることや何をどこまで理解しているのかなどを看護師や教員が把握することが重要となってくるので、学生に関わろうとする姿勢は大切と考える。

2. 今後の課題

質問紙調査の結果より、実習中、学生にロールモデルを示すことができたか」という質問については、「全くそう思う」、「だいたいそう思う」が10名(47.6%)と半数以下であった。このことについては、安酸(2006)が行った経験型実習教育の方法論及び内容を検討するための質問紙調査の結果の中で「実習指導に関して自分のモデルとする教師がいる」と答えた教員もしくは看護師は全体の半数以下であったことから、実習施設の看護師や教員においても同様に実習指導に関して自分のモデルとする看護師や教員があまりいないのではないだろうか。これより、看護師や教員が学生のロールモデルとなることが難しいと考える。したがって、今後は経験型実習教育への理解が広まっていくにつれて、より精神看護の専門的な内容の企画をワークショップの中に盛り込むなどの工夫が必要になると考えられる。

企画・運営委員会では、A大学から実習施設が遠いため、ワークショップを病院で開催してほしいといったワークショップに関する要望があった。吉田(2000)は2ヶ所の実習施設で、実習指導者の役割認

識へ向けたワークショップを開催したところ、ワークショップの内容の価値については、両病院より100%近い割合で価値があったという質問紙調査の回答を得たと報告していた。これより、ワークショップによる実習指導効果を上げるためにも、制約の異なる病院に合わせて、ワークショッププログラムを企画・運営することも必要と考える。

講演やワークショップの日程などに関する否定的な評価については、企画・運営委員会を開き、検討したり、ワークショッププログラムに関する事前アンケート調査をしたりするなど対策を練る必要がある。また、ワークショップへの参加がより主体的なものになる為には、看護管理者の組織的な目的も勿論あると思うが「実習指導をしてみたい」、「ワークショップに参加してみたい」という看護師の希望を優先して臨床指導者を決定していただくということも視野に入れる必要があるかもしれない。企画・運営委員会の回数が多いといった否定的な評価についても、企画・運営委員や病棟の負担とならぬよう企画・運営委員会の段取りを効率よく組むなど検討する必要がある。企画・運営委員会、ワークショップの必要性や理解が実習病棟内の看護師に浸透していないことについては、実習施設において経験型精神看護実習を開始して、まだ2年目であるため当然のことともいえる。また、企画・運営委員会を立ち上げたのは、今年度からの取り組みである。したがって、企画・運営委員会で、実習施設や大学が抱える実習やワークショップに関する困り事を分かち合い、1人でも多くの人にワークショップに参加してもらえよう工夫していく必要がある。

おわりに

実習施設の看護師と教員が協働で、ワークショップを企画・運営し、開催したことによりもたらされたワークショップ参加者の実習指導への効果を明らかにすることを目的として、アクションリサーチを実施した。その結果、ワークショップの参加者の90.5%が「(ワークショップへの参加が)実習への実り(学生の学び)につながった」、71.4%が「ワークショップは実習指導に役立った」と5段階評価のうち「全くそう思う」、「だいたいそう思う」と答えていた。また、自由記載より、ワークショップによる参加者への効果として、＜実習内容の共有ができた＞、＜経験型実習教育への関心の増大＞、＜実習指導意

欲への動機付け>といったことが明らかになった。しかし、その反面、現実と講演内容のギャップ、ワークショップの日程による実習への支障や企画・運営委員会の回数が多いことなど、多くの今後の課題も明確になった。

今後は、これらの課題を企画・運営委員会で検討し、実習施設と大学が協働してより良い実習教育を行うための基盤作りを行っていききたい。

謝 辞

ワークショップ企画委員やワークショップへの看護師の派遣をして下さった実習施設の管理者及び看護管理者に感謝致します。また、経験型精神看護実習教育ワークショップの企画の段階からご協力下さった実習施設の看護師の皆様、そして研究にご協力下さった看護師、教員の皆様に心より感謝致します。

付 記

本研究は、平成17年度福岡県立大学研究奨励交付金の補助を受けて行った。なお、結果の一部は第16回日本看護学教育学会で発表した。

文 献

加藤千恵子, 久保かほる, 鈴木妙 (2004). 教員と実習指導者の連携を助ける「成人看護実習指導の手引き」の実際: 第2回「慢性心不全患者の看護」の手引き, *看護教員と実習指導者*, 1(2), 112-122.

小林ミチ子, 池田京子 (2004). 教育と臨床の効果的な連携・協働, *看護展望*, 29(4), 86-91.

村島さい子 (2001). 実習生の経験と向き合う臨床実習教育: より重要となる教師と実習指導者の協力, *看護教育*, 42(2), 94-98.

中野民夫 (2006). *ワークショップ*. 135, 140, 146, 岩波新書, 東京.

中村恵子 (2003). 教員と臨床の実践的連携をめざしてー青森県立保健大学のユニフィケーションの実態と評価, *臨床看護*, 29(8), 1173-1178.

錦織亜子 (2002). 実習環境改善に向けた取り組み, *看護教育*, 43(7).

小川朋子, 山本知美, 岡有美. 他 (2004). 分娩介助実習における病院と学校の連携に関する一考察, *日本助産学会誌*, 17(3), 94-95.

作田裕美, 坂口桃子, 東玲子. 他 (2004). 急性期・回

復期看護学実習における教員と選任指導者による複数連携体制, *看護教育*, 45(9), 743-747.

田村正枝 (2004). 看護基礎教育における看護実践能力向上と病院との連携のあり方, *病院*, 63(4), 297-302.

安酸史子, 村島さい子, 中津川順子. 他 (2003). *学生とともに創る臨床実習指導ワークブック*, 12, 医学書院, 東京.

安酸史子, 村島さい子, 中野榮子. 他. (2006). 経験型実習教育のシステム化に関する研究, *平成16年度～平成17年度科学研究費補助金[基盤研究(B)]研究成果報告書*, 6.

吉田久美子, 坂本祐子, 高田みつ子. (2002). 実習指導者の役割認識へ向けたワークショップの効果分析ー制約の異なるA・B病院の指導者に実施してー. *第33回日本看護学会論文集*, 320-322.

受付 2007.6.29

採用 2007.10.2